

コダーイ／ガラタ舞曲

ゾルターン・コダーイ（1882-1967）というと、多くの方が思い出すのは組曲《ハーリ・ヤーノシュ》と、この《ガラタ舞曲》ではないだろうか。民族色を感じさせる作風で、どちらにもヴェルブンコシュという舞曲が使われている。新兵を募るときの踊りに基づく様式で、とくに1780年ごろから1830年ごろにかけてハンガリーで成熟し、国民的な広がりを見せた。音楽的な特徴としては、付点のリズム、遅いテンポと速いテンポの交代、即興的な装飾などが挙げられる。バルトークは「ハンガリー精神を完璧に体現している作曲家の名をあげよと言われたら、コダーイと答えるだろう」と述べているが、その言葉通り、コダーイ作品の魅力はハンガリー風の味わいにある。

ガラタとはかつてハンガリー西部にあった小さな町の名前（現在はスロバキア領）で、ブタペストとウィーンを結ぶ街道沿いにある。コダーイは少年時代の7年間を、この町で過ごしている。ここにはロマの居住地があったので、彼は幼いころからロマの音楽に触れていた。また、のちにこの地方のマジャール民謡も調査している。つまり、ハンガリーに古くからあるマジャール民謡とロマの音楽のどちらもが、コダーイにとってのハンガリーだと言える。

《ガラタ舞曲》は1933年、創立80周年を迎えたブタペスト・フィルハーモニー協会の記念式典のために作曲された。主要な舞曲の楽想は1800年ごろにウィーンで出版されたロマの曲集から選んだという。チェロのユニゾンで付点リズムの楽想が奏でられる導入部に続いて、3つの舞曲がリトルネロと交代で演奏されるロンド形式となり、コーダで終わる。どっぴりと重みのある節回しの導入部に続いて、クラリネットがリトルネロの主題をニュアンスたっぷりに提示する。テンポが変わってフルートが軽やかに主題を提示する第1の舞曲となり、トゥッティによるリトルネロが続く。ふっと雰囲気が変わって、オーボエの独奏で第2の舞曲が始まる。メルヘンのような優美な楽想を繰り返したあと、民族色の強い素早い楽想となる。緩急を繰り返しながら、最後はロマの音楽さながらにテンポをあげて高揚し、リトルネロとなる。続いて、シンコペーションが特徴的な楽想で第3の舞曲が始まる。再度、リトルネロが再現されたのち、猛烈なコーダとなる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。